

令和元年6月5日現在

機関番号：16102

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K16682

研究課題名（和文）戦後思潮における浪漫主義/全体主義の要素分析 中河與一「天の夕顔」受容を軸に

研究課題名（英文）Romanticism/Totalitarianism in Post-World War II Thought in Japan: Yoichi Nakagawa's_Ten-no Yugao_(Moonflower in Heaven) and Its Audience

研究代表者

黒田 俊太郎 (KURODA, SHUNTARO)

鳴門教育大学・大学院学校教育研究科・准教授

研究者番号：10646946

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、1948年に公職追放された中河與一（1897-1994）の恋愛小説「天の夕顔」（1938）が、その発表から映画化（1949）を経て1950年代半ばまでの長期に亘り、「天の夕顔ブーム」と呼ぶ現象を惹起したことの意義を考察した。

具体的には、中河が戦前に創刊した同人誌を見ることで、「天の夕顔」執筆に至る思想的背景を析出し、テキスト分析するとともに、同時代評の収集・解析により人々の「期待の地平」（ヤウス）を測定した。それにより、中河の言論界からの追放後も彼の浪漫主義/全体主義の観念が人々の心性に微温的に潜在し続けたことを示し、1950年代半ばにかけた戦後思潮の一側面を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

第二次世界大戦後、中河與一という作家の存在は言論界から封殺され、忘れ去られていった。その一方で、「天の夕顔」というテキストが提供する物語に対する人々の期待はますます高まっていった。本研究の学術的意義は、そうした特異な状況に注目し、「天の夕顔」の受容層・影響圏の調査結果を踏まえながら、人々の「期待の地平」の変容を測定することで、戦前から戦後にかけた思想状況、及び当時の人々の心性について解明したところにある。

研究成果の概要（英文）：In this study, I analyzed the meaning of the lasting popularity of Yoichi Nakagawa's (1897-1994) love story_Ten-no Yugao_(Moonflower in Heaven, 1938), which continued up to the mid-1950s despite Nakagawa's purge from public service in 1948.

In examining the text itself, I outlined the philosophical background that prepared Nakagawa for writing_Ten-no Yugao_, by referring to magazines he launched before World War II. In addition, I collected and analyzed cotemporary reviews of_Ten-no Yugao_to assess the "horizon of expectations" (Hans Robert Jauss, 1921-97) shared by readers at that time. Through these approaches, I showed that Nakagawa's romantic/totalitarian concept continued to be latent in people's minds even after his purge. In other words, I tried to clarify one aspect of the post-war thought in Japan up to the mid-1950s.

研究分野：日本近代文学

キーワード：中河與一 「天の夕顔」 浪漫主義 全体主義

様式 C - 19, F - 19 - 1, Z - 19, CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

申請者は、『作家 という近代 北村透谷・浪漫主義』(博士論文, 文学, 慶應義塾大学, 2011年)で, 明治期の浪漫主義文学者である北村透谷(1868-94)の社会的イメージが, 彼の死後いかなる変容を遂げたかということについて, 死の直後から1930年代後半にかけて追跡調査した。調査の過程で最も興味深かったのは, 1930年代の動向だった。1937年, 自身も日本浪漫派同人だった中河與一を主導者とし, 多くの日本浪漫派同人が中心となり透谷会を結成, 同年透谷文学賞を設立している。透谷会の理念は, 自己を犠牲にし全体に奉仕することを肯定する全体主義的なものであり, 彼らは日中戦争に応召する兵士と透谷とを難なく同列化して語っていったのである。日本浪漫派は, リアル・ポリティクスに従属した国策文学を批判しながら, 美的なるもの の樹立を志向する理論と実作とによって大衆を魅惑することを企図し, 実際, 戦争について殊更に語ることなく, 間接的に人々を死へと駆り立てていった。だが, そのことに関する諸研究は, 日本浪漫派を理論面で牽引した文芸評論家保田與重郎(1910-81)の言説に分析対象を限定し, それを日本浪漫派全体の思考・理論として演繹するような傾向が強かった。日本浪漫派の実作として最も大衆性を保持していた中河の恋愛小説「天の夕顔」ですら, これまで全体主義の文脈で論じられてはこなかった。

2. 研究の目的

申請者はすでに, 戦時下における浪漫主義と全体主義との思想的連関の解明に寄与するため, 保田と比肩するような際立った特徴を有すると考えられる中河に注目し, 主に1935年頃の中河の小説テキスト以外の言説に注目するという方法で, 中河が「全体主義」に到達する直前に標榜していた「永遠思想」なる理論に関する分析を進めてきていた。本研究ではさらに, 以下の4つの課題をクリアしながら研究を推進することを目的とする。第1に, 中河の理論構築の試みは少なくとも1929年の「形式主義」論提唱から始まり, 幾度かの変節を繰り返しながら「全体主義」に至るとすれば, 「永遠思想」単独の分析の意義は小さい。その上で第2に, 理論変節の過程は同人誌の創刊と見事に符合するとすれば, 同人の言説を含めた同人誌研究という枠組みの導入が不可欠である。第3に, 1929年の「形式主義」論から戦中の「全体主義」論に至るまで, 間断なく実践された理論構築の試みは, 美的なるもの の実作のためであり, 小説テキストの分析も併せて行う必要がある。第4に, その小説テキストがいかに読まれたか, いかなる影響を及ぼしたかという受容の様態を測定する必要がある。

3. 研究の方法

(1) 同人誌研究を通じた理論変節の調査(上記第1・第2の課題)

本研究では, 中河與一が創刊した同人誌『新科学的文芸』(1930-33), 『翰林』(1933-36), 『文芸世紀』(1939-46)における中河の言説・編集方針・他の同人の言説等を総合的に分析することで, 中河の芸術理論の変節をたどる。

(2) テキスト分析と受容層の調査(上記第3・第4の課題)

また, 「天の夕顔」(1938)の他, 「数式の這入った恋愛詩」(1930)などの小説のテキスト分析を進めると同時に, 同時代評の収集・解析を行う。

4. 研究成果

本研究は, 1948年に公職追放された中河與一(1897-1994)の恋愛小説「天の夕顔」(1938)が, その発表から映画化(1949)を経て1950年代半ばまでの長期に亘り, 天の夕顔ブームと呼ぶ現象を惹起したことの意義を考察した。

具体的には, 中河が戦前に創刊した同人誌『新科学的文芸』『翰林』『文芸世紀』を見ることで, 「天の夕顔」執筆に至る思想的背景を析出し, テキスト分析するとともに, 同時代評の収集・解析により人々の「期待の地平」(ヤウス)を測定した。それにより, 中河の言論界からの追放後も彼の浪漫主義/全体主義の観念が人々の心性に微温的に潜在し続けたことを示し, 1950年代半ばにかけた戦後思潮の一側面を明らかにした。

(1) 大正中期頃より, 文学/科学的言説の境界を意識的に取り払い, 互いの領野を横断し合うような動向が見られる。昭和に入り文学者中河與一が提唱した二つの文学論(形式主義論・偶然論)は, いずれも 科学 を強く意識したものだった。両文学論に共通する鍵語は「飛躍」だったが, その事は形式主義論の 必然思想 としての性格を覆い隠し, 思考の不連続性という事態を看過させてきたといえる。中河は自身の形式主義論の中に「メカニズム」という概念を導入するが, 黒田俊太郎「メカニズムからの飛躍 - 中河與一の 新科学的 という発想について」(『鳴門教育大学研究紀要』31, pp.198-208, 鳴門教育大学, 2016年)では, この概念が生成される過程を美術界のメカニズムの動向などを視野に入れつつ明らかにした。また横光利一との メカニズム論争 を通して起こった中河の形式主義論の変容を跡づけつつ 必然思想 としての性格を明らかにし, 偶然論に進むために残された課題をあぶりだした。

(2) 黒田俊太郎「メカニズムからの飛躍 - 中河與一の 新科学的 という発想について」(『鳴門教育大学研究紀要』31, pp.198-208, 鳴門教育大学, 2016年)において, 中河與一の芸術理論である「偶然文学論」の萌芽的発想である 新科学的 なる思考(= 初期偶然論)を跡付ける作業を行ったが, 黒田俊太郎「中河與一の 初期偶然論 における必然論的側面 小説「数式の這入った恋愛詩」の分析を通して」(『鳴門教育大学研究紀要』32, pp.322-332, 鳴門教育

大学, 2017年)では, そうした思考が獲得された直後に発表された小説「数式の這入った恋愛詩」(『科学画報』1930・9)を分析し, 初期偶然論 という理論がいかんして実作へと応用されたかを検証した。そのことを通じて同小説には, 中河がその直前に提唱していた芸術理論である「形式主義論」の到達点/限界点が寓意的に示されていることを明らかにした。

(3) 中河與一の代表作として世上に知られた「天の夕顔」(1938)は, 恋した年上の人妻が亡くなるまでの23年間, 全てを犠牲にして想い続けた男を描いた恋愛小説である。全体主義の鼓吹者でもあった中河の同小説は, アジア・太平洋戦争下において空前のヒット作となる。黒田俊太郎「中河與一「天の夕顔」の批評圏 倉田百三の同時代評を中心に」(『語文と教育』32, pp.45-58, 鳴門教育大学国語教育学会, 2018年)では, 同時代評を総覧し, ブームを創造した読者共同体の性格を析出した。

(4) 小説「天の夕顔」でベストセラー作家となった中河與一は, 戦中の全体主義的発言を理由に, 1948年GHQにより公職追放された。だが追放直後に映画「天の夕顔」(新東宝製作・東宝配給)が公開されるなど, 中河は 天の夕顔ブーム の渦中にあった。黒田俊太郎「中河與一と戦争責任 映画「天の夕顔」を起点として」(『鳴門教育大学研究紀要』34, pp.198-208, 鳴門教育大学, 2019年)では, 映画「天の夕顔」公開前後における, 中河へのページの状況を調査分析した。その際, 文学界における戦争責任問題・公職追放の問題・東宝争議の問題等の観点から考察を加えた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 8 件)

黒田俊太郎「中河與一と戦争責任 映画「天の夕顔」を起点として」(『鳴門教育大学研究紀要』34, pp.198-208, 鳴門教育大学, 2019年)

黒田俊太郎「中河與一「天の夕顔」の批評圏 倉田百三の同時代評を中心に」(『語文と教育』32, pp.45-58, 鳴門教育大学国語教育学会, 2018年)

黒田俊太郎・幾田伸司「「盆土産」(三浦哲郎)の教材研究のための覚え書き」(『語文と教育』32, pp.12-21, 鳴門教育大学国語教育学会, 2018年)

黒田俊太郎「書評: 中山弘明著『溶解する文学研究: 島崎藤村と 学問史』」(『昭和文学研究』76, pp.225-227, 昭和文学研究会, 2018年)

黒田俊太郎「中河與一の 初期偶然論 における必然論的側面 小説「数式の這入った恋愛詩」の分析を通して」(『鳴門教育大学研究紀要』32, pp.322-332, 鳴門教育大学, 2017年)

村井万里子・原卓志・余郷裕次・小島明子・幾田伸司・黒田俊太郎・田中大輝「教科専門と教科内容の架橋を図る国語科教師教育の実際 「教科内容構成(国語科)」を通して」(『語文と教育』31, pp.28-47, 鳴門教育大学国語教育学会, 2017年)

黒田俊太郎「二つの近代化論 島崎藤村「海へ」・保田與重郎「明治の精神」」(『語文と教育』30, pp.22-43, 鳴門教育大学国語教育学会, 2016年)

黒田俊太郎「メカニズムからの飛躍 - 中河與一の 新科学的 という発想について」(『鳴門教育大学研究紀要』31, pp.198-208, 鳴門教育大学, 2016年)

〔学会発表〕(計 1 件)

黒田俊太郎「中河與一「天の夕顔」を読む」(大学連携図書館講座(松茂町立図書館), 2018年)

〔図書〕(計 3 件)

黒田俊太郎『「鏡」としての透谷 表象の体系/浪漫的思考の系譜』(翰林書房, 2018年)

黒田俊太郎「変容する 透谷 小田切秀雄の文学史把握とポジショナリティ」『「私」から考える文学史 私小説という視座』(pp.106-126, 勉誠出版, 2018年)

小森陽一・飯田祐子・五味淵典嗣・佐藤泉・佐藤裕子・野網摩利子・黒田俊太郎他『漱石辞典』(翰林書房, p.558, p.569, 2017年)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年:

国内外の別:

取得状況(計 0 件)

名称:

発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：
ローマ字氏名：
所属研究機関名：
部局名：
職名：
研究者番号（8桁）：

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。